

○坂下賢副委員長 続いて、社民フォーラム県議団の質疑を行います。

なお、質疑時間は答弁を含めて十分です。熊谷義彦委員。

○熊谷義彦委員 県民の生活に寄り添って県民の方々を支えられる県政を求めて、幾つかお尋ねさせていただきます。

まず初めに農業問題なのですが、食料をいかにして確保するのかというのは、政治的に第一義的な大きな命題だろうと私は思います。そういった命題の中で、今叫ばれている来年からの肥料の確保、飼料、そして種の確保、この三点について現状認識をお聞かせください。

○宮川耕一農政部長 人口増加や経済発展による世界の食料需要増加等に伴いまして、肥料や、配合飼料にも使われる穀物の需要が拡大を続けております。一方で、コロナ禍やウクライナ情勢、中国による輸出制限などの影響によりまして、肥料原料や飼料原料の主要産出国からの供給が一部滞る事態となっております。更に円安によりまして、我が国の購買力も相対的に低下しております。こうした厳しい状況を受けまして、国では調達先の多角化を支援するなどしており、来年の春肥をはじめ肥料や飼料の供給については、これまでのところ量的には問題ないものと考えてございますが、今後事態がどのように変化するかについては依然として見通せない状況であると認識しております。なお、野菜の種子や果樹の苗木につきましては、現時点で供給に問題は生じていないと認識しておりますが、引き続き動向は注視してまいりたいと考えてございます。

○熊谷義彦委員 野菜、果物、花苗の栽培の関係も含めて、種が物すごく高くなっている。そのところをきちんと注意をして見ておかないと大変なことになってしまいうなどというように思いを、まず一点お話を申し上げます。それから前段部長がお話した状況について、私も承知をしているわけでありますが、ただ、現時点で量的に確保したということは、私はそういう認識は全くありません。そういう認識がないがゆえに、国ですら国土交通省と農林水産省が下水汚泥の肥料化を検討しているわけで、先行きは大変厳しい状況になつてきているのではないかというふうな思いがあるのですが、これは全農を含めて、県として春肥、秋肥、それから農薬含めて、全く問題がないという認識でよろしいのですか。

1
○宮川耕一農政部長 私が申し上げましたのは、現在、来春の春肥までの期間において、

量的にはきちんと確保されたと同っているということをごさいますて、今委員がおつしやいましたように、中長期的に量の確保も危うくなるのではないかという可能性はあるものと思つてごさいます。

○熊谷義彦委員 国のほうがそういうふうに言つているのであれば、それを信用するというのも一つの手だけれども、私は大変危機的な状況になつてくるのではないかと心配しております。そういった中で、では代替品を含めてどのように確保していくのかというところが、宮城県のにも大きな課題になつてくるのだらうと思ひます。例えばわらであれば、コンバインで三十センチメートル以上のわらを確保してくれという指導をすればいいのですよ。それから下水汚泥、ビール粕が利用できるという話もあるのだけでも、質問する前に、このビール粕と下水汚泥の利用についてどういふ検討をなさつていいますか。

○宮川耕一農政部長 まず下水汚泥につきましては、国によりますとその多くが焼却され、焼却灰が建築資材等に利用されております。また、肥料の原料としての利用は約一割にとどまつているということをごさいます。それからビール粕でございますけれども、これは多くが飼料として有効活用されておりますて、一部が堆肥化に回つていふことをごさいます。肥料価格の高騰を受けまして、国は、委員お話しのように下水汚泥や堆肥等の未利用資源の利用拡大を検討するということにしておりまして、今月十七日に下水汚泥資源の肥料利用の拡大に向けた官民検討会を開催し、今後も月一回程度開催を続けまして、年内を目途に論点の整理を行うことにしていると伺つております。我が県としましても、その検討状況を踏まえまして、企業局など関係部局と情報共有を図りながら、活用方法等について検討してまいりたいと考えてごさいます。

○熊谷義彦委員 国の動向を待つのも分からないわけではないけれども、県として宮城県の下水汚泥、ビール粕をどのように活用するのかということをご委託研究する、あるいは学識経験者を集めて検討するということ、宮城県の望ましい姿は私はそのにあるのだらうというふうに思ふのです。そして、例えば下水汚泥の問題でも、私にもわか勉強してきたのですが、PFASという化学物質が含まれていふ可能性があるということもあるし、重金属の問題もあると。重金属の問題は前々から私も承知をしておりますが、そういったことも含めて課題がないわけではない。ですから、この重金属は取り除けるといふ

ふうに私は理解しているのですが、PFASについてはなかなか難しいと言われております。ただ、PFASの問題は、アメリカで今大変問題になっていると言われているのですから、とにかく研究機関に何らかの形で肥料が足りなくなること前提にして県産の未利用資材を使えるような検討を私は進めるべきだと思うのですが、いかがですか。

○宮川耕一農政部長 先ほど申し上げました検討会の中で、その汚泥中の重金属の安全性の問題ですとか、あるいは、実はリンが含まれているということがございまして、国内で必要なリンの分量が、肥料としては三十万トンなのですが、五万トンぐらいが下水の中に含まれているということで、こういったものを有効に回収する方策などがその検討の論点となっていると伺っております。国のほうでこういったものを整理されるということですので、これを参考に県としても検討してまいりたいと考えております。

○熊谷義彦委員 公営企業管理者、私のことではないと思っていられると困るのですよ。自分のことですからね、下水汚泥は。

それでもう一つ、栗原市にも堆肥センターがあるのですが、堆肥はあるけれどもそれをペレット化する機械がないのです。今回、たまたま補正予算で県のほうから配慮してもらって、栗原市としてもペレット化する機械を配慮してもらったものですから、これは大変感謝しています。知事にも感謝しています。ただ県内的には、この堆肥をペレット化する予算がまだまだ私は足りないというふうに思っていて、堆肥をどのようにして活用するのか、ペレット化するのか、それはこれからの施策を考えれば必要なことだろうと思うのですが、知事、ぽっこり質問して悪いけどどうですか。

○宮川耕一農政部長 これは、私も委員のおっしゃるとおりだと思っております、まずは堆肥の利用が大事だと。そのためには散布のしやすさ、あるいは流通のしやすさという点で、ペレット化というのは非常に有力な手段だという考えでございます。そのため、議会でお認めいただきましたが、補正予算でそういった施設整備の補助を取っております。また、国におきましても、国庫事業としてそういった支援策は講じられているというふうに承知しております。実はそのペレット化する際の問題というのがございまして、やはり堆肥をまず発酵させるといことで、堆肥センターの運転の仕方できちっと発酵できる菌叢をつくらなくてはいけないというのがありますので、そういったところの底上げも含めて、しっかり検討して対応してまいりたいと考えてございます。

○熊谷義彦委員 農政部には、その指導も含めて十分な対応をいただけるように、心からお願いを申し上げておきたいと思えます。

それから、知事、仙台空港の検疫の関係なのですが、アフリカ豚熱が仙台空港で過去において発見されたと聞いておるのですが、それはどういったところからアフリカ豚熱のウイルスが発見されたと理解をしていますか。

○宮川耕一農政部長 アフリカ豚熱の関係でございますけれども、平成三十年十月以降、全国の空港等におきまして動物検疫所の検査を行っており、そこで輸入を認めなかったソーセージなどにつきまして、アフリカ豚熱検査を行っております。令和四年八月六日時点で合計百五例の陽性が確認されておりまして、そのうち仙台空港では、令和元年に二例のウイルス遺伝子が検出されました。いずれも中国発の便でございます。

○熊谷義彦委員 インバウンドで多くの方々が日本に来られるということを極端に私は反対するものではないけれども、やはり養豚家の方々は大変心配をしています。そういう意味では、知事からも検疫体制をもっと強められるように国のほうにお願いしていただきたいと思うのです。知事いかがですか。

○村井嘉浩知事 はい、分かりました。

○熊谷義彦委員 もう少し丁寧に。以上で終わります。